自治医科大学
Jichi Medical University

がんプロ ニュースレター

2020.12

自治医科大学　大学院医学研究科　地域がん総合医学
特命教授　山口　博紀

毎年、自治医大がんプロ市民公開講座を開催してまいりましたが、今年度は新型コロナウイルス感染症対策のため、誠に残念ながら中止とさせていただくことといたしました。

いつも本学へ足を運んでいただいている皆様には、今年度はニュースレターの形で、がんに関する情報をお届けすることといたしました。

現在のところ、まだ新型コロナウイルスへの新規感染が栃木県内でも連日報告されており、まだまだ予断を許さない状況が続いております。ご自身のがんやがん治療へのご心配に加え、新型コロナウイルス感染症について、不安を抱えていらっしゃる方も多いと思います。

このニュースレターでは、がん関連3学会（日本癌学会、日本癌治療学会、日本臨床腫瘍学会）合同連携委員会の新型コロナウイルス（COVID-19）対策ワーキンググループ（WG）が作成した、がん診療と新型コロナウイルス感染症についてのQ&Aを紹介します。

このQ&Aの原文は、インターネットで 「新型コロナウイルス感染症とがん診療について（患者さん向け）Q&A」と検索して閲覧することができます。

また、自治医科大学附属病院の新型コロナウイルス感染症に対する対応については、病院ホームページのトップページよりアクセスすることができます。

新型コロナウイルス感染症Q＆A
～がん患者や家族、周りの人へ～

1．疫学的なこと

1）がん患者は新型コロナウイルスに感染しやすいですか？

がん患者においては、がんそのものにより免疫状態が低下している可能性があります。またがん治療には、化学療法をはじめとして免疫状態が下がる治療方法が用いられます。新型コロナウイルスはウイルス感染症であり、免疫力が低下した状態で感染する可能性が高いと想定されます。

2）がん患者が新型コロナウイルス感染の予防に関して気をつけた方が良いことはありますか？

新型コロナウイルスは非常に感染性が高いことが分かっています。がん患者ではない方と同様、外出を控え、密集・密閉・密接のいわゆる三密を避けることが重要です。また手洗い、咳エチケットなども基本的な予防行動を取ることが勧められます。具体的な行動に関しては新型コロナウイルス感染症対策専門家会議「人との接触を8割減らす、10のポイント」を参考にしてください。

さらにがん患者に特有な新型コロナウイルス感染予防として、不急な病院受診を控えることも考慮されます。あるいは昨今国内でも導入された電話・オンライン診療[3] を利用するなどの対策を取ることで、リスクを下げることが可能です。受診される際には、公共交通機関ではなく自家用車を利用することで、他の人と接触する機会を少なくすることができます。

2．免疫とウイルス感染との関わり

1）がん患者では免疫が落ちていますか？

全てのがん患者で免疫が落ちるわけではありません。 化学療法などにより免疫細胞の数や機能が低下している方では、免疫の機能が低下しており感染が増悪しやすい状態になっています。特に、過去14日以内に抗がん治療（化学療法、免疫療法、放射線療法を含む）を受けた28人の患者を調べた結果では一般人と比べ4倍以上の重症化の危険性があったと報告されています。ただ、この点については、危険性が変わらないという報告もあり本当に抗がん治療によって重症化につながるのかどうかは現段階では結論が出ていません。また、免疫の低下している患者や、肺に障害を受けている患者では重症化の危険性が高いことが報告されています。免疫力はいろいろな要因で変化します。詳細な機構は不明ですが、栄養不良、睡眠不足、疲労、ストレスなどによっても変化すると言われています。免疫細胞の数や機能が低下している方では、これらの点にも留意する必要があります。

2）重症化に免疫は関与していますか？

ウイルス感染を受けた細胞から分泌されたインターフェロンなどにより免疫細胞が活性化します。活性化した免疫細胞はウイルスを攻撃する抗体を産生し、ウイルスや感染を受けた細胞を攻撃し排除しようとします。免疫細胞の活性化には様々なサイトカインと呼ばれる物質が分泌されますが、その量が過剰になるサイトカインストーム（サイトカインの嵐）と呼ばれる状態になると、活性化した免疫細胞が正常な細胞にもダメージを与えるようになり新型コロナウイルスの重症化に関与しているとの説が有力です。なぜサイトカインストームが起きるかはよく分かっていませんが、主要な炎症性サイトカインであるIL-6の血中濃度が高い人では肺炎が重症化しやすいと報告されています。

3）一度免疫ができたら二度と感染しませんか？

ウイルス感染後に抗体ができると同じウイルスに対する記憶をもつ免疫細胞が残り、2回目以降の感染や重症化を防

ぎます。2回目の感染を防げる期間はウイルスごとに異なり、麻疹（はしか）ウイルスのように感染するとほぼ生涯続く（終生免疫と呼びます）ものから数か月しか続かないものまであります。今回の新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）についてはまだ分かっていません。強力な化学療法などによって免疫力が落ちると潜伏感染しているウイルスが再活性化や、新たなウイルスや細菌による感染が起きやすくなります。新型コロナウイルスについて明らかな潜伏や再感染の報告はありません。また、免疫ができたかどうかを知る指標として抗体検査が行われますが、抗体が陽性でも感染する可能性やまだ感染中である可能性もあり抗体検査の解釈には注意が必要です。

PCR検査で一旦陰性と判断された患者がその後再び陽性となった症例が報告されていますが、これがPCR検査の偽陰性（本当は感染が続いているのに検査で陰性になること）なのか、微量に体内に残っていたウイルスが再増殖したのか、抗体ができにくい特異体質だったのか、治癒した後再感染したのかなどいろいろな可能性が考えられ、いずれが正しいかは分かっていません。

3．主治医に相談すること

1）新型コロナウイルスに関して、かかりつけの医師にはどんなときに相談した方がいいですか？

がんの治療や受診に関して不安に思うことがあれば、現在の状況に応じた適切な判断を主治医に聞きましょう。また、今後の治療方針や選択肢、予定についても主治医に相談しましょう。多めに内服薬をもらえるか、熱が出たときの解熱剤をもらえるかなどについても聞いておくとよいでしょう。

4．検査について

●新型コロナウイルス流行期におけるがん関連の検査について

下記に一般的な指針を示しますが、患者さんの状態、住まれている地域の流行状況、医療体制によって異なります。

1）主治医からがんが疑われる状態といわれています。検査は受けるべきでしょうか？

がんの可能性がある患者さんは通常、血液検査、画像検査、内視鏡検査など多くの検査をして診断に至り、治療が開始されます。これらの検査の中には、検査を受ける方、検査をする方の接触が濃厚であるものもあります。がんが強く疑われる場合は、予定通り検査を受ける必要がありますが、がんの可能性が低い場合は検査をある程度延期ができる場合もあります。主治医と良く相談してください。

2）内視鏡検査が予定されています。どうしたらいいですか？

内視鏡検査は、患者さんおよび医療従事者にとって濃厚接触を伴うため、新型コロナウイルス感染症の流行期には必要最小限にすべきと考えられています。ご自身の検査の必要性を検討いただき、予定通り受けるべきか確認してください。

3）がん治療後の経過観察のための検査がありますが、受けるべきですか？

流行期には延期できる通院は、延期を検討すべきです。治療後の患者さんで、定期的なチェックを受けられている場合でも、ある程度延期するといった対応が取れる場合もあります。担当の先生とよくご相談ください。

4）がん検診は受けても大丈夫ですか？

がん検診や健診・人間ドックも感染拡大のリスクとなる懸念があります。一方でいたずらな受診控えは早期発見の機会を失いかねません。受診者とスタッフの双方の感染防止を配慮して行っている医療機関もあります。まず、ご自身が受診できる医療機関にがん検診や健診の受診が可能かをお問い合わせください。

●がん患者さんの新型コロナウイルス検査について

1）がん患者は新型コロナウイルスの検査で、陽性が出にくいですか？

新型コロナウイルス感染症の検査で一般的に行われている検査はPCR検査と抗原検査です。PCR検査はウイルス特有のRNA、抗原検査はウイルス特有の蛋白の有無を調べます。鼻咽頭のぬぐい液や唾液、喀痰を採取し、その中にRNAや蛋白が存在するかを検査します。検査の仕組みから考えて、がん患者さんであることが検査結果に影響を及ぼすことは考えにくいです。一方で、これらの検査結果が陰性であったとしても、新型コロナウイルス感染症ではない、とは言い切れないことが知られています。特に、新型コロナウイルス感染症の症状が持続する場合は注意が必要です。

この他、現在、新型コロナウイルスの抗体検査が検討されています。これは、新型コロナウイルスに対する体の免疫反応を検出するものですが、がん患者さんは病気そのものや抗がん剤などの治療が抗体検査の結果に影響を及ぼす場合があるため、主治医と良くご相談ください。

2）がん患者は優先的に PCR 検査を受けられますか？

PCR検査数は増加傾向にありますが、検査体制はそれぞれの地域や医療体制によって異なります。新型コロナウイルスの感染が心配な場合、各自治体の帰国者・接触者相談センターやかかりつけ

医への相談、受診は以下の症状が目安になります。

・息苦しさやだるさ、高熱などの強い症状のいずれかがある
・発熱やせきなど比較的軽い風邪の症状が続く場合
・症状には個人差があるため強い症状だと思う場合

ただし、高齢者や基礎疾患があり重症化しやすい人、妊娠中の人は、発熱やせきなどの比較的軽い風邪の症状がある場合、すぐに相談、受診を推奨しています。

5．治療に関して

●治療全般のこと

1）現在、がんの治療を受けています。延期した方がよいのでしょうか？

延期した方がよいか、予定通り行った方がいいかについては、がんの種類や体の状態、治療の目的や状況などによりますので、主治医の判断が必要です。不安に思って自分で判断することなく、主治医とよく相談してみることがなによりも大切です。また、発熱や咳などの症状がみられる場合には、必ず受診する前に主治医へ連絡してください。

2）病院に行かずに近くの薬局で薬を受け取ることができますか？

新型コロナウイルス感染症の流行に際して、電話やインターネットなどを通じて診察を受け、病院に行かずに近くの薬局で薬を受け取ることができる場合があります。希望する場合には、通院している病院に電話で問い合わせてみましょう。

また、薬剤師から電話などで薬の説明を受けて、郵送などの方法で薬を受け取ることができることもあります。

いずれも、定期的に受診している、受診しなくて良い状態であるかを主治医が判断しているなどの要件を満たすことが必要です。病院や病状によっても対応が異なりますので、主治医にご相談ください。

3）熱や咳などの症状が出て新型コロナウイルス感染症が疑われる場合、がんの治療をやめた方がいいでしょうか。

もしご自身に熱や咳などの症状がある場合には、ご自分で判断せず、事前に、主治医やかかりつけの医療機関に連絡して、ご相談ください。主治医に、発熱した時期や咳などの症状の詳細を伝えてください。がんの治療内容や病状と勘案して、その後の対処方法について指示を受けましょう。

4）治療が変更されて（予定より遅れて）、必要な治療を受けられているか、がんが進行しないか心配です。

新型コロナウイルス感染症の影響で、がんの診療の予約や治療予定が変更される場合があります。また定期的に受けていた検査が受けられないことで、がんや治療の状況が心配になる方もいるかもしれません。

かかりつけの医療機関では、感染拡大防止対策を徹底し、主治医はがんの進行状況や治療効果、地域の流行状況などから総合的に判断して治療方針を提示しています。心配なことや質問があれば、その内容を書き留めておき、主治医に忘れずに質問してください。

5）がんの治療を受ける予定です。通院や入院をするのに、注意することはありますか？

すでに受診予定の医療機関がある場合には、医療機関のホームページや電話で、受診方法の留意点などについてご確認ください。

また受診予約があり、新型コロナウイルス感染症と疑われる症状がある場合には、事前に必ず医療機関に連絡するようにしてください。

・2週間以内に新型コロナウイルス感染症患者やその疑いがある方と接した場合
・高熱、呼吸器症状（咳・咽頭痛・呼吸苦）、強い倦怠感がある場合
・またこれまでのがんの治療の際に出た症状とは異なる症状が出ている場合
・その他心配な症状がある場合

●手術など外科的治療について

外科治療全般について

新型コロナウイルスに感染している患者さんについては、よほどの緊急でなければ、治療により感染が悪化して致死的になる危険性があるので治療を延期した方がよいと考えられます。感染のない人でも、市中感染の頻度が高い地域では治療中に感染を起こす危険性があるので延期できるものはした方がよいでしょう。一般的に進行がんの治療は緊急性が高い場合が多いですが、早期がんの場合は治療を延期しても大丈夫な場合が多いと考えられます。そのため早期がんの場合には、術後の新型コロナウイルス感染症の重症化のリスクを考えると延期した方が良いと考えらえる場合が多いとされています。また、一部の手術など医療従事者への感染の危険性の高い治療は万が一あなたが感染していた場合、院内感染を広げる恐れがあるので、検査を精密に行ったり、手術に代わる代替治療や手術の延期等が考えられることもあります。ただし、手術の予定の変更に際しては自己判断で手術を中止したり、延期したりすることはしないで、手術予定の病院の受け付けに電話をし、主治医または看護師等へ連絡、相談をしましょう。

1）手術後に新型コロナウイルスに感染すると重症化しやすいのでしょうか？

がんの手術後1か月以内に新型コロナウイルス感染症にかかった患者さんは重症化しやすいという報告があります。特に術後間もない患者さんは外出自粛や手洗いなどの感染対策の徹底をお願いいたします。

2）がんの手術を受ける予定でしたが、延期した方がよいでしょうか？

自己判断で手術を中止したり、延期したりすることはしないで、手術予定の病院の受け付けに電話をし、主治医または看護師等へ連絡、相談をしましょう。手術の延期の影響はがんの種類や病期（がんの進行度）によって異なります。がんの種類や病期によっては手術以外の治療をまず行うことも考えられます。また、地域によって新型コロナウイルスの感染の広がり方も異なりますので、受診されている病院の感染対応や対策の状況なども含めて、様々なことを考える必要があります。今の時期に手術をした方がよいのか、延期すべきか、何らかの手術以外の治療を行うのか、主治医の先生から十分お話しを聞いて、よく相談をしてください。

3）定期的な検査や診察の予定が入っています。延期してもよいのでしょうか？

がんの治療後の定期的な検査や診察は、自己判断で中止したり、延期したりすることはしないで、かかりつけの病院の受け付けに電話をし、主治医または看護師等へ相談をしましょう。

●放射線治療について

1）現在、放射線治療を受けています。新型コロナウイルスに関して注意することはありますか？

放射線の局所照射で、感染に対する抵抗力（免疫力）が大きく低下するという科学的根拠はありません。放射線治療を受けた患者さんが新型コロナウイルス肺炎を起こすと重症化しやすいとの報告もありません。ただし、抗がん剤を併用した化学放射線療法では、免疫力が低下する可能性があります。また照射法や線量にもよりますが、胸部への照射では数か月後に放射線肺臓炎を来すことがあり、これに新型コロナウイルス肺炎が重なると重症化のリスクが高くなる可能性は否定できません。放射線治療が他のがん治療に比べて危険性が高いとは考えにくいですが、がん患者さんは健康人より新型コロナウイルス感染の重症化リスクが高いことがわかっていますので感染予防を徹底する必要はあります。

2）新型コロナウイルス流行地域での放射線治療を中断、延期すべきでしょうか？

ごく早期のがんやホルモン療法などの待機治療が可能な前立腺がん、リスク

の低い乳がんなどで、放射線治療の延期が可能な場合もありますが、がんの治療開始を遅らせることによる影響の有無とその程度について、主治医と十分に相談する必要があります。あなたの病状や治療の内容、あなたのお住まいの地域の新型コロナウイルスの流行状況などによって異なりますが、放射線療法の延期は好ましくないことが多いと思われます。放射線治療をうけることが心配でしたら、主治医に十分に相談してください。放射線治療の中断も治療効果を低下させるので、できるだけ避ける必要があります。特別な理由が無い場合には可能な限り継続してください。

そのほか放射線治療開始前、治療中、終了してからの注意事項は、日本放射線腫瘍学会の一般向けホームページに書かれていますので参考にしてください。

https://jastro-covid19.net/patient/

●薬物治療について

Ⅰ．細胞傷害性抗がん薬

1）現在化学療法を行なっていますが、このまま継続しても良いでしょうか？

あなたの病状と現在の治療内容によって変わりますので、主治医とご相談ください。治療を定期的に行なっている場合には、発熱などが起きた場合の対応を主治医と事前に相談しておくことが良いでしょう。

2）化学療法中に発熱したらどうしたらよいですか？

主治医に確認して受診が必要か相談してください。

息切れも伴う場合には診察する場所の準備が必要になる場合があるので、事前に連絡していただいた方が良いと思います。

Ⅱ．分子標的薬

1）分子標的治療を受けていますが、新型コロナウイルス流行時に治療を続けても大丈夫でしょうか？

がんの種類や分子標的治療薬の種類によっても異なりますが、多くの分子標的治療薬は治療を継続しても新型コロナウイルスの感染リスク・重症化リスクは上昇しないと予想されます。特にがんの増殖に不可欠な分子をターゲットにした分子標的治療薬（EGFR遺伝子変異を持つ肺がんに対するEGFR阻害薬、BRAF遺伝子変異を持つ肺がん・悪性黒色腫に対するBRAF阻害薬＋MEK阻害薬併用療法など）の場合、治療によるメリットが大きいと考えられるため治療の継続をおすすめします。

一方で、新型コロナウイルス流行時に行う分子標的治療のデメリットとして、下記の点が挙げられます。

・分子標的治療薬の副作用である肺炎（薬剤性肺炎）が起こった場合、新型コロナウイルス肺炎と区別がつきにくく肺炎に対する治療が遅れる可能性がある

・一部の分子標的治療薬（mTOR阻害薬、CDK阻害薬や細胞傷害性抗がん薬と併用する血管新生阻害薬など）では、副作用による白血球減少のため新型コロナウイルス感染症の発症リスクが高まる可能性がある[注]

また、通院により新型コロナウイルスにかかるリスクを減らすために、通院回数を減らすことが可能かどうかについても考慮されます。治療のメリットとデメリット、通院間隔については主治医とよく御相談ください。

注　2020年6月27日現在、これらの薬剤で新型コロナウイルスにかかりやすくなるというデータは報告されていません。

●免疫療法について

1）免疫チェックポイント阻害薬による治療を受けていますが、新型コロナウイルス流行時に治療を続けて大丈夫でしょうか？

免疫チェックポイント阻害薬により新型コロナウイルスの感染リスクが高まるというデータはありません。また、免疫チェックポイント阻害薬により新型コロナウイルスが重症化するかについては一貫したデータがなく現時点では不明です。このため、現時点（2020年6月27日現在）で積極的に免疫チェックポイント阻害薬を中止する根拠はないと考えられます。

一方で、新型コロナウイルス流行時に行う免疫チェックポイント阻害薬治療のデメリットとして下記の可能性が考えられます。

・免疫チェックポイント阻害薬の副作用である薬剤性肺炎が起こった場合、新型コロナウイルスによる肺炎と区別がつきにくく肺炎に対する治療が遅れる可能性がある

・理論上、免疫チェックポイント阻害薬投与中に新型コロナウイルスに感染すると重症化リスクが高まる可能性が否定できない

実際の免疫チェックポイント阻害薬継続の可否にあたっては、治療のメリットとデメリットについて主治医とよく御相談ください。また、通院によって新型コロナウイルスにかかるリスクを減らすため投与間隔を普段よりも長くする、あるいは一時的に休薬し通院回数を減らすことができるかどうかについても併せて御相談ください。

●ホルモン治療について

Ⅰ．前立腺がん

1）新型コロナウイルスの感染が拡大している状況下で、前立腺がんに対す

るホルモン療法は行うべきでしょうか？

転移のある前立腺がんに対する薬物治療は開始するべきであり、その際は抗がん剤よりホルモン療法を優先させるべきです。抗がん剤の場合、白血球が下がるなどの副作用が起きて入院治療が必要になることがあるからです。ホルモン療法の注射をする場合、1か月製剤より作用期間の長い3か月あるいは6か月製剤を用いるべきです。ステロイドホルモンを治療の一部として用いる際は、感染症のリスクが上がることを考慮して、その使用を最小限にするべきです。

Ⅱ．乳がん

1）抗ホルモン薬を内服していますが、飲み続ける必要はありますか？

通院あるいは電話等での診療を通して処方箋を発行し内服を続けていただくことができますが、ご高齢であったり、すでに5年以上内服されている方は、主治医との相談によって内服を中止することができます。

2）術前の治療として抗ホルモン薬を内服中です。予定されている手術が近づいていますが、その時期に手術を受けなければだめですか？

薬が効いて腫瘍が縮小したり消失しているようでしたら、治療期間を半年から1年程度行った上で手術を行うことも考慮されます。主治医に画像診断できちんと評価していただいた上で相談してください。

3）再発乳がんのため抗ホルモン薬の治療中ですが、分子標的治療を追加する場合があると主治医から言われています。白血球減少や間質性肺炎などの副作用があるようですが、追加しなければだめですか？

今の治療が効果的でしたらこのまま治療を継続し、CDK4/6阻害薬やmTOR阻害薬などの追加を見合わせることも考慮されますので、主治医と相談してください。

Ⅲ．婦人科がん

1）子宮内膜異型増殖症・早期子宮体がん等に対してホルモン治療を受けている場合はどのようにしたら良いでしょうか？

主治医と相談して、基本的にはそのまま治療を続けてください。

2）子宮内膜異型増殖症・早期子宮体がん等に対する手術を延期する場合に、ホルモン治療を受けても良いでしょうか？

異型内膜増殖症・早期子宮体がんで手術を一定期間、延期せざるを得ない場合、待機している間にホルモン治療を受けるほうが進行を遅らせられる可能性が

ありますので、おこなうかどうかは主治医とご相談ください。

●補助的な治療について

Ⅰ．前立腺がん

1）定期的に輸血を行なっています。このまま継続してもよいでしょうか？

元々のご病気によりますので主治医に一度ご相談ください。

2）定期的に骨折予防の薬を投与しています。このまま継続してもよいでしょうか？

薬の種類次第では飲み薬に切り替えることも可能です。主治医にご相談ください。

6．緩和ケア

1）緩和医療を外来で受けています。治療は続けられますか？

基本的に緩和医療の継続は可能です。がんによるつらい症状を和らげることは、生活の質の改善につながりとても大切なことです。流行状況にもよりますが、医療機関では最大限の配慮をしながら、できる限りの対応に努めています。一方で、不要な外出や接触を減らすことは患者さんを守るためだけでなく、流行状況を収束させることにも有効です。受診頻度を減らし外来通院期間を延長することや、電話やオンラインでの診療に切り替えることが無理のない範囲で可能かどうか、主治医に相談してください。

2）新型コロナウイルスが心配なので、通院を中断しても良いですか？

医療機関での接触や通院のための外出が不安という気持ちはよくわかります。しかし、緩和医療のための通院が中断できるかは、患者さんそれぞれの病状により異なります。例えば、ステロイド剤を内服されている患者さんが通院を中断し、内服も中断されるとステロイドホルモンの不足により副腎不全という深刻な状態に陥ってしまうこともあります。また、疼痛の緩和目的で放射線治療を行っている患者さんの場合では、中断により放射線治療の効果が限定的になってしまうなどの不利益が予想されます。主治医とよく相談して不安を共有していただき、通院の中断が可能か、間隔の延長は可能か、オンライン診療への切り替えが可能かなどの方法をご検討いただければと思います。

3）緩和医療で使用する鎮痛剤が新型コロナウイルス感染症を悪化させる、と聞いたのですが？

一時、イブプロフェンなどの解熱鎮痛剤が新型コロナウイルス感染症を増悪させる、との報道がなされまし

た。しかしながら、現在のところこれを支持する科学的な根拠はありません（WHO、2020年4月19日時点）。がん性疼痛などの治療目的で鎮痛剤を使用される場合も、通常と同様に使用可能と考えられます。

4）緩和病棟への転院を検討していますが、入院できますか？

日本緩和医療学会が行ったアンケートでは、全国の半数以上の緩和ケア病棟で患者さんの受け入れ状況に変化があったことが明らかになりました。その時の流行状況に影響されますが、まずは希望される緩和ケア病棟にご相談いただければと思います。

5）親しい人が緩和病棟に入院しています。面会はできますか？

全国の緩和ケア病棟を対象とした前述のアンケートで、新型コロナウイルス感染症流行中にはほとんどの施設で面会制限をしたことが明らかとなっています。また、その面会制限は施設により様々であり流行状況にも影響されると思われます。まずは、対象の施設に問い合わせいただくことをお勧め致します。面会が可能であった場合でも、感染対策に十分に配慮をしていただくようお願いいたします。

6）在宅で家族が緩和療養をしています。注意することはありますか？

家族内の発症は在宅で緩和医療を受けている方だけでなく、往診や訪問看護、在宅ケアサービスなどに感染が拡大する可能性があります。介護者の方は、最大限の感染防止に努めていただくだけでなく、ご自身の体調管理にも注意をお願いいたします。この他、日本在宅ケアアライアンスによる新型コロナウイルス感染対策をご参照ください。

7．治療後の経過観察や通院

1）がん治療を受けています。治療に行くのが心配なのですが、どのようにしたら良いのでしょうか？

がん治療を受けていて、受診することが心配な場合、次の治療に行く前に病院に連絡し、指示に従ってください。一部の人はがん治療を安全に遅らせることができますが、治療を遅らせることができない人もいるためです。

2）私はがんサバイバーで、再発の可能性を検出するために定期的に検査を受けています。この検査を受け続ける必要がありますか？

一般に再発がないかどうかの検査は、一定の間隔でおこなわれるもので多少の延期は問題ないと考えられます。主治医の先生と連絡を取り、スケジュールを調整してください。

ただし、がんの再発が疑われるような新しい症状が現れた場合は、次の予定されている受診を待たずに、主治医に相談してください。

3）がん患者やがんサバイバーが、発熱や咳などの新型コロナウイルス感染症の初期症状を自覚した場合、どのようにしたら良いでしょうか？主治医や地域のお医者さんにすぐにかかった方が良いでしょうか？

あなたががん治療中であれば、主治医に電話で連絡し、必要な指示を受けてください。連絡無しに病院を訪れることは避けてください。

また、あなたが現在はがん治療を行なっていないがんサバイバーの場合は、かかりつけ医に電話で相談し、必要な指示を受けてください。同様に連絡無しに病院を訪れることは避けてください。

4）がんサバイバーは、新型コロナウイルス感染対策に関する一般公衆衛生上の推奨を守るべきですか？

もちろんです。社会的な距離を保つこと、手洗いをしっかりとこまめにおこなうこと、人ごみを避け、身の回りの触れる部分を綺麗にして除菌すること、あなたの手が完全に洗浄されていないときに顔に触れないようにしてください。

5）私は自分の診断や、勧められた治療についてセカンドオピニオンを求めたいと考えますが、すぐには出来そうにありません。どうしたら良いでしょうか？

セカンドオピニオンをおこなうことは非常に重要なことです。しかし現在、医療機関によっては、セカンドオピニオンの対応が難しい場合があることを理解してください。電話等で相談できれば、セカンドオピニオンの代替とすることを主治医と検討してください。

8．生活上のアドバイスなど

1）外出の自粛は緩和されましたが、第2波、第3波の感染拡大が心配で不安です

感染症の影響で長期にわたり生活の変化が求められています。がんの心配に加え第2波、第3波の感染拡大が懸念されていますので、心配や不安を抱えるのは無理もありません。自分は大丈夫、と思っていても心理的負担をすでに抱えている場合もあります。外出の自粛要請は緩和されましたが、身近な人や主治医などの医療従事者と十分なコミュニケーションがとれない状況が続いています。ひとりで悩んでしまわないようにすることが大切です。次のようなことを心がけてみてください。

・電話やメールなどで身近な人と話したりして、できる限り連絡を取り合うよ

うにしましょう。

・適度な運動やバランスのよい食事と睡眠、禁煙、節度のある飲酒を心がけて規則正しい生活を送りましょう。
・読書や料理など趣味を楽しんで気分転換をしましょう。
・テレビやインターネットなどの情報を見過ぎないようにしましょう。
・心配や不安が強いときには医療従事者やがん相談支援センターに相談してみましょう。

わからないことや心配なことがあるとき、おかかりの病院の受付に電話をして、主治医や看護師等へ連絡し、対応方法を相談してください。体調の変化、医療費の支払いなどの不安や心配事については、がん相談支援センターなどの電話相談を利用することもできます。

●家族や周りの人へ

1）入院中の家族との面会はできますか？

流行は落ち着いてきていますが、多くの病院では、面会は原則として禁止としています。しかし、入退院の送迎や、状態が不安定なときなどの面会については、主治医の判断で決められることが多いようです。ただし、できるだけ少ない人数で短時間であることが求められます。面会を希望したいときには、まずは、病院に電話で問い合わせてみましょう。

2）通院の付き添いはどうしたらよいでしょうか？

通院に付き添う際には、発熱や咳などの症状がなくても、マスクを着用するほか、咳エチケット（咳やくしゃみをする際に、ハンカチ、袖を使って、口や鼻をおさえる）や手洗いの徹底を心がけるなどの周りの人への気遣いをお願いします。付き添う人に熱があったり、風邪の症状があったりする場合には、他の人に代わってもらいましょう。

3）面会が制限されていて、入院している家族に会うことができません。何かいい手段はないでしょうか。

入院されている患者さんに面会できないことが多くの医療機関で続いています。直接会うことが難しい場合にも、医療機関によっては、電話やスマートフォンやタブレットを使って、間接的に会えるようにしてくれるところもあります。一方で、新型コロナウイルス感染症の影響で、医療スタッフが十分な人数いないなど、対応が難しい場合がありますので、どのような対応方法が可能か、問い合わせてみましょう。

4）治療や外来受診以外のために（例えばがんの治療に関わる相談など）病院に行っても大丈夫でしょうか？

流行は落ち着いてきていますが、急ぎではない用件の場合、各病院への立ち

入りは制限されている場合があります。病院に行く必要がある場合には、まず病院のホームページや電話で確認しましょう。もし治療や体調の変化の他にも、医療費の支払いなどを含め不安や心配事があるときには、がん相談支援センターなどの電話相談を利用することもできます。やむを得ず病院に行く場合には、十分な感染対策をとる必要があります。

◆厚生労働省「新型コロナウイルスに関するQ&A（一般向け）」「新型コロナウイルス感染症の予防法」
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryou/dengue_fever_qa_00001.html

5）病院で開催されている患者サロンなどの集まりに参加できますか？

流行は落ち着いてきていますが、安全性を考えて、患者サロンなどは休会・延期となっている病院がまだ多いようです。しかし地域によっては、再開を検討しているところもあるようですので、もし開催されていて参加しようと思ったときには、「換気の悪い密閉空間、人が密集する場所、密接した近距離での会話」の「3つの密」が避けられ、十分な感染対策が行われていることをあらかじめ確認してください。

なお、電話やSNS、オンライン会議システムを使って、交流の場を提供している患者団体などもあります。制限された中で、信頼できる人たちや仲間とのつながりは、あなたの支えになります。ぜひさまざまな方法を工夫してみてください。どうしたらいいかわからない場合には、がん相談支援センターで一緒に考えることもできます。相談してみましょう。

がん最適化医療を実現する医療人育成　自治医科大学

連携大学：東京大学・横浜市立大学・東邦大学・北里大学・首都大学東京

自治医科大学がんプロ事務局
自治医科大学大学事務部学事課大学院係
TEL：0285-58-7476
FAX：0285-44-3625
E-mail：cancer@jichi.ac.jp